

## 第1回 開設準備検討会 議事概要

- 1 日時 令和元年5月29日(火) 9:30~10:55
- 2 場所 富山県民会館 701号室
- 3 委員出席者 井上 孝 大西 ゆかり 加藤 敏久  
金岡 克己 神川 康子 佐脇 由紀子  
牧田 和樹
- 4 幹事出席者 教育長 伍嶋 二美男  
理事・教育次長 布野 浩久  
教育次長 坪池 宏  
参事・教育企画課長 広沢 久也  
生涯学習・文化財室長 菊池 政則  
教職員課 坂林 根則  
教育参事・保健体育課長 東瀬 義人  
教育参事・県立学校課長 本江 孝一  
県立学校課教育改革推進班長 番留 幸雄

### 5 会議の要旨

司会が開会を宣し、教育長が挨拶した。

#### 組織運営事項（会長の互選、副会長の指名）

司会から、議事に先立ち、開設準備検討会設置要綱第5条第2項の規定により会長を互選していただく必要がある旨を説明し、委員に諮ったところ、金岡委員を推挙する発言があり、全員異議なく、金岡委員を会長に選出した。

金岡会長の就任挨拶の後、同要綱第5条第4項の規定により、金岡会長が神川委員を副会長に指名し、以後の議事については同要綱第5条第3項および第6条第1項の規定により、会長が進行した。

#### 議事事項

##### (1) 県立高校再編の実施計画における新高校の開設準備について

事務局から資料および参考資料に基づき、本会における検討事項の確認と検討に当たって参考とする事柄などについて説明した。

## ① 高校再編に係る学習活動や学校行事、部活動等に関すること

(金岡会長)

- ・最初に、高校再編に係る学習活動や学校行事、部活動等に関することについて意見をいただきたい。

(神川委員)

- ・前期再編の評価等に関する委員会等々のことも踏まえてお話しする。
- ・新高校においては生徒を中心に考えながら、学習活動、学校行事、部活動等々について、統合する両校の良いところを生かした形で継続をしていくことが重要と考える。
- ・それぞれの良いところがより強化されてさらに充実していくような方向性で、その後安定して学習活動、学校行事、部活動も継続していけるような体制を作っていくということが非常に重要。そういったことを目指し検討していかなければならない。
- ・部活動についても、今までやってきたことの幅がさらに広がるような形で実施してほしい。年次進行で、統合される高校の生徒数が減っても、継続したい部活動は活動の機会が保障されるよう、移動などについても卒業まで全力で体制を整える配慮をしていただきたい。
- ・新高校で学ぶ生徒たちの学びの範囲が広がり、さらに将来への可能性が拡大するような学校になってほしい。
- ・今は、一つ目の議題だけということだが、名称、校章などが非常に大きなネックになってくるだろう。前期再編も踏まえながら、新高校開設準備室が対象校の同窓生、学校関係者等のご意見をいただいて検討していくのがよいと思う。

(佐脇委員)

- ・泊、水橋、高岡西、南砺福光高校の4校へ今年4月に入学した生徒は、3年後、自分が卒業した後に校舎がなくなり、閉校になることを十分承知して受検している。ただ具体的にどういった状況になるのかということまでは、まだ深く考えていないと思う。2、3年生になり実情に接した時、この学校を選ばなければよかったと思うのではなく、この学校に来てよかったと誇りを持って言えるように様々な方面から充実した対応をお願いしたい。
- ・新高校についても教育備品などを新しくする予算も組まれているようだが、最新の機能を備えた物を購入するなど、施設・設備の面でも充実を図り、生徒の学習、部活動で手厚い対応を取っていただきたい。

(牧田委員)

- ・参考5に前期再編の基本的な考え方があるが、前期再編で特別大きな問題が起きていないか。あるいは、基本的な考え方でよかったのかをお聞きしたい。
- ・その結果を踏まえて、全体的な方針として二つ提案する。一つは、二つの学校の学習内容や部活動などの良いところを新たにできる学校が引き

継ぐということ。もう一つは、これまで長い歴史を築いてきた学校への配慮が必要ということ。校名がブランドになっている学校もあるので、その辺の配慮も必要であると考えている。

(教育長)

- ・前期再編は10校が5校となり、今回と違い、工業系の高校が対象になっていた。その工業系の学校では、実習施設を新規に整備するなど、教育内容をより充実させたことにより、生徒の学ぶ範囲が広がり、充実・強化が図られた。
- ・また、学校規模が大きくなったことで選択科目が広がり、生徒にとって選択肢の多い充実した学校ができた再編であった。
- ・今のところの評価とすれば、当初の予定どおり学習活動をより強化充実することができた。また部活動、学校行事においても当初の見込みどおり良い形で切り替わった。今のところ大きな課題というものはないと考えている。

(加藤委員)

- ・以前、学校の管理職を経験していた立場からお話しさせていただく。特に新高校側は、新しい発想で魅力ある学校を作り、教育活動としての一つのまとまりを作らなくてはならない。その中で数々の問題点が出てきた時、学校の先生方はマイナスへ向かうベクトルよりも、新高校をスタートさせるというプラス面の発想を優先させ、新しい理念と魅力を作り出すという創造的な心構えでこの難局に当たっていただきたい。
- ・統合されていく学校においては、在校生が最後まで卒業する学校に誇りと自信を持ち続け、卒業する高校が素晴らしい学校だったという気持ちで卒業させてやりたい。
- ・事務局からの説明では、相当の予算を投じてこの難局に当たっていただいている。現場としては、それに応え、元気を出して統合という困難に向かい進んでいただきたい。

(大西委員)

- ・PTAとしては、子供たちにとってよりよい教育環境を整えることが保護者の責務であると考えている。子供たちが恵まれた環境の中で教育を受けられるということが、私たちPTAにとって変わらぬ願いである。
- ・再編対象校となり、新校舎に活用されない学校にいる生徒の皆さんが、母校に誇りを持って、胸を張って、気持ちよく学習し、部活動に励み、卒業できるよう、この学校を卒業して良かったと思えるように教育環境の充実に取り組んでいただきたい。
- ・昨年度、長男が受検生だったが、学校選定にあたっては、オープンハイスクールを利用した。また、ホームページを本当に細かいところまで読んだ。受検生、保護者の皆さんに、この再編の概要をオープンハイスクール、ホームページを通して伝え、十分な検討材料となるよう充実させていただきたい。

(井上委員)

- 前期再編の礎があるので、そういったことを確認しながら、何が足りないのかとか、どういう議論が必要なのかということを検討していくべきである。
- 特に移行期に様々な問題が起きるのではないかと考える。その際、生徒中心という視点に立ち、フォローする必要があると考える。様々な変化、混乱を良い方向で納めなくてはならない。
- また、再編が終わった後の振り返りが重要。変化はすぐには分からないが、過去の伝統、歴史、良いところをつなぎ合わせて何をどういった形で残せたのかなど、成果の検証というものが必要であると考え。
- この検討会は、ある程度大きな考え方しか議論できないし、詳細の部分は各準備室の方で議論されている。生徒中心といった時に、生徒が自分たちで自覚して新高校をどういう方向にしていきたいのかを考えられるように、自分たちで新しい高校を作っていくという意識付けを教育の中で行ってほしい。
- 新高校で学んだ人たちが、新しい伝統を残していくような流れが必要。教育の中でそういった意識付けを確認して進めていただきたい。

(金岡会長)

- 今ほど、各委員からいくつかの視点が提示された。複数の方から、両校の良いところをそのまま受け継ぐ努力をしていただきたいとの意見があった。
- また、閉校していく学校の生徒へのフォローをどう考えていくべきかという配慮は必要という意見があった。
- 複数の方から、前期再編結果の振り返りが必要との意見があった。
- 古くからの校名も残っているので、各学校の歴史、ブランドなどの意識をどう考えていくのかとの意見があった。
- ご長男が受検された経験からのご意見をいただいたが、受検生にとっては、現実にはどういう学科があって、どういう生徒たちが来て、その高校に入れるだろうかということが身近な問題として重要であると感じた。
- この検討会では、校名などフレームワークの議論が多くなるが、伝統という側面は、むしろ同窓生の方が気にされることであって、受検生のような当事者の意見より、その周りの方の意見が強すぎると感じる。
- 企業で言うと、百年を超えるような企業も富山県ではたくさんあり、日本には、世界でも突出して古い名前、歴史と伝統を持つ企業が大変多い。
- 一方、明治維新で、がらりと変わり、たくさんあった藩の数が、廃藩置県、明治以降の市町村大合併を経て数が減ってきた。そういう新しいものに順応していく力が、日本がここまで発展してきた所以と考える。歴史を大切にすると同時に、新しい物に対処していけるような柔軟性もある。この高校再編に係る実務的な問題をどういうふうにかいていけばよいかは、一人一人によって考え方が異なる場所であると感じた。

## ② 新高校の名称、校歌、校章等に関すること

(金岡会長)

- ・続いて、2番目の課題（新高校の名称、校歌、校章等に関すること）についても皆様からご意見をいただきたい。

(井上委員)

- ・前期再編の中で、大きな考え方が示されたと思う。基本的にはそれにさらに追加していくようなことがあるのかという議論を多少重ねていけば、ある程度解ける問題である。
- ・従来の歴史、特に校名だけに議論を持っていってしまうと、なかなか解けない。そこに新高校ができるという観点でいくと、さほど難しい議論ではないと感じる。

(大西委員)

- ・PTA連合会の中でも、役員会で校名については少し話題にした。それぞれの地域の方々の思いがある。前期再編の基本的な考え方に則って検討していただければよいと考える。
- ・学校名が変わって、校歌を新しくする場合、作詞、作曲などに時間がかかるのではないか。来年の4月開校に間に合うのか。

(事務局)

- ・前期再編では、氷見高校が新しく校歌を作った。新しい校歌を作る場合、校名、教育目標などの学校の骨格が先に決まることが必要であり、それを受けて作ることになる。氷見高校の場合、最終的には、2、3年程度をかけて、新高校の生徒が全員揃うときまでに新高校の校歌が出来上がった。

(加藤委員)

- ・新たに校名等に関する基本的な考え方を出す場合、議論を蒸し返すのではなく、相当時間をかけて検討された参考5の基本的な考え方を踏まえればよいと思う。

(牧田委員)

- ・難しい問題だと思うが、これから入ってくる子どもたちは、校名、校章、校歌については、さほど気にしていないのではないかと思う。ここに歴史を支えてきた同窓生などが、その問題に着目すると、歴史やブランドというのは外せない。例えば、学校を新しくするからといって、校歌も何も全部作り直そうなどというのは軽率な気がする。ここまで時を重ねてきたということを大事にしていきたい。

(佐脇委員)

- ・前期再編の基本的な考え方に、新しい高校の名称について書かれているが、参考4の校名の一覧を見ると市町村名がついている高校がほとんどである。これについて、富山県として何か指標や考え方みたいなものがあったのか。

(事務局)

- ・校名の傾向について説明すると、参考4に、現在ある全日制県立高校38校の校名が載せてある。たとえば魚津市にある魚津高校のように学校所在地の市町名を使用したものと、泊高校のように泊高校開設時に所在地であった町名(泊町)を使用したものがある。このように所在地を使用したものが全部で34校ある。
- ・残りは4校あり、富山市や高岡市への編入前の町名を使用したものが3校、具体的には水橋高校、呉羽高校、伏木高校。もう1校は、県内唯一の農業科の単独校である中央農業高校。これについては開設された当時の市町名等を使っていない高校になる。
- ・34校のうち、現在1市町に1校となっているケースは8校。それらは全て開設当時の市町名になっている。具体的は、現在の市町名と同じものは4校で入善高校、滑川高校、上市高校、氷見高校。開設当時の町名を使ったものが4校で泊高校、桜井高校、雄山高校、石動高校。
- ・同一市内に普通科を設置している高校が複数設置されている場合がある。こうした場合には、市町名に東西南北などの方位、位置を表す文言を付加しているケースが7校ある。富山市では富山西、富山中部、富山北部、富山東、富山南。高岡市では高岡西、高岡南。
- ・市の名称に旧の町名を付加しているケースが3校。南砺市で、南砺福野、南砺平、南砺福光となっている。
- ・開設当時の市町名をそのまま使用しているケースは2校。射水市の大門高校、新湊高校。
- ・こうしたことが本県の全日制県立高校の校名の傾向である。

(佐脇委員)

- ・今の説明にあったように、所在する地域や学校の特徴が分かる名称だと中学生、その保護者にとって非常に理解しやすいと考える。また学校選択の際にも、比較しやすいという利点があると考えます。
- ・生徒たちは決まった学校名を素直に受け入れていくと考える。しかし、同窓生、地域の方の中で対立や混乱が起きてしまった場合に、それを聞いたり感じたりすることは子供たちにとって決して良い影響を与えない。関係の方々には、十分に配慮していただいて検討を進めていただきたい。

(神川委員)

- ・大変デリケートな問題で、最後に皆さん悩まれるのがこういう校名、校歌などである。富山大学も3大学が統合するときには大きな問題があった。名称をどうするかを考えたとき、それぞれ自分のところを愛するが故に、いろんな問題が出てきた。しかし、新入生は、こういうものだと思って入学しているので何の問題もなかった。
- ・在校生は統合によって新しい人を受け入れることに抵抗があるかと思っただが、それもなかった。ある意味ダイバーシティ、色々な人が入り、人数が拡大して様々な人と関わることにより思わぬ効果が見えてきた。

様々な領域の人、様々な道、学科を目指す人と関わることが総合大学であり、再編後の効果になると思うが、学科制もそこにつながっていくと思う。

- ・在校生と生徒数がだんだん少なくなっていく学校について配慮をしていけばよいと思う。
- ・企業でも大学でも同じだが、順応していくと、時代に適応していく力が生徒たちについてくる。それを先生、保護者が応援する形であれば、さらによい方向に行くと思う。
- ・できれば周辺の同窓生の微妙なバトルのようなものを生徒たちに感じさず、今ここにいる、また新しく入学してくる生徒たちのことを考えていけばよいと思う。
- ・名称については、参考5にあるように、富山県内においてそれがどこにある高校なのかが分かるということはとても大切だと考える。ふるさと愛を育むという点でも、地域が分かるということ、そして工業、農業など学校の特徴が分かる名称であることが重要。それからみんなで親しんでいく、さらに充実していく、これから歴史を作っていくという気持ちになれるようなものがよいと思う。
- ・制服などについても何にも変わらないのではなくて、例えばそこに何かをアレンジする、インナーの素材、ネクタイを着けるなどのマイナーチェンジをしながら新しいものを生徒たちが考えていくのもよいと思う。
- ・校歌も、完成形を与えるのではなく、完成年までに徐々に生徒の意見も取り入れながら、自分たちが作ってきたという自負を持てるようなものにしていけばよいと思う。
- ・大きく変えるものと変えないものはあると思うが、手を加えられる余地を残していけばよいと思う。

(金岡会長)

- ・個別の話には立ち入らず、新高校の名称、校歌、校章に関することを検討しなくてはならないという大変重い課題なので、発言しにくいところもあったかと思う。
- ・企業の歴史全般に詳しいわけではないが、バブル崩壊以降、様々な業界で再編が行われてきた。特に金融業界は、当時の大きな銀行が相当数減った。大きな再編が行われた業界がいくつもある。一般論だが、内部論理、例えばいくつかの合併から全く新しい名前にしなければならないというところは、明確な統計的なものではないが、うまくいってないと感じる。
- ・全く新しい名前ではアイデンティティーが失われてしまう。ゼロスタートでやって良い事柄と、そうでないものがある。地域で生きていくことを考えた場合、同窓生の力などを大切にしなければならないこともある。企業再編で言えば、全くユニークな名前をつけたところは必ずしもうまくいってないというのが実態ではないか。むしろ、少し大きさに差があ

るのであれば、最初は少し配慮するが、最終的にはもともと慣れ親しんだブランドを選ぶ。結局企業の場合はお客様にサービスを使って、買っていたかなければならない。慣れ親しんでないブランドは使わなくなる。したがって、失敗している例は一種の内部論理で名前を決めたということになる。この例が県立高校に当てはまるかどうか分からないが、考えていかななくてはならない一つの視点だと思う。

- そこで、この開設準備検討会の範疇ではないが、委員の意見を総合すると、例えば閉校になる学校で教えていく校長先生をはじめ教職員の方々が、どういう意識で生徒にあたっていくのか、あるいは統合されたときに同窓会がどうなっていくのかなど、再編の枠組みを定めることよりも、その後のオペレーション、どういうふうになっていくのか、それについての道筋をどう、誰がつけていくのかが重要。これはおそらく教育委員会だけではできないこと。そこの話し合いがうまく進んでいけば上手くいくだろうし、重大な対立が起きてしまえば非常に大きな問題になる。
- 制服なども非常に大きな問題。特に男子でいまだに古い制服を使っているとところもある。この検討会で議論することからは外れるが、枠組みが決まった後、同窓生、関連当事者の皆さんがどのように意見を統一していくかが重要。後で混乱するようだと新高校の生徒にも影響が及ぶ。
- 一通り意見をいただいたが、①、②を通して、また皆様の意見を聞かれて、開設準備検討会でさらに意見を集約していく上で大事なことは何か、あるいはこのことについてもう一度強調しておきたい、などあれば伺いたい。
- 皆様からは、前期で既にさまざまな検討がされ再編が実行されているので、校名の決め方などは、その時の経験を踏まえて、それを踏襲するのが正しいのではないかというご意見をいただいた。
- 複数の委員からあったように、前期再編の問題点などが検証され、特に問題がないのであれば、前期再編の方向を大きな方針として打ち出していけばよいと感じる。

(加藤委員)

- 中学校から高等学校へ行く時は、子供たちにとっては初めて県下全域に選択肢が広がる時期である。高校を選択するときも自分の町の中学校ではない、他の地域ということが多くなる。そういう時に校名からその学校のイメージと地域がつながっていくはず。先ほど事務局から説明があったように、これまでの高校の名称というのは、地域が分かる地域密着型で来ている。
- 中学生にとって、どの高校を選ぶかという時に、どこの高校かというイメージが出てこなければ、学校選択が難しいのではないかと感じる。中学生にとっては、地域が分かったほうがよい。したがって前期再編の基本的な考え方に、所在する地域が分かるという考え方が出ているのだろう。



- ・例えば「希望高校」という名前を付けたところ、どこにあるのかという言葉がまず出るだろう。地域が分かるということが大切であると改めて思う。また、どんな名称で決めるにしても、賛否両論が出るはず。名称問題というのはどう決まったところで反対もあれば賛成も出るので、今後どうなるか分からない。ただ、その中で決まった以上はそれで伝統が作られていく。そう考えると、様々な方法があるだろうが、県が主体的に決定していくべき。世の中では、国民投票のようなこともしているが、多数決論理でというのはいかがかと思う。どちらにせよ賛否両論が出るのだから、県が主体的に責任を持って決定していくべきことではないか。

(井上委員)

- ・校名については、地域名が出てくるのがちょうど高校ぐらいかと思う。幼稚園、保育所ならば、タンポポ、サクラなど、なじみやすい名前を付ける。小学校では、統合の中でも、「希望」のように明るい未来を想像させるような名前が付く。中学だと、地域名称がある程度付いてくるのかもしれないが、高校になって初めて、過去の伝統と高校のイメージ、こういうところに入りたいという選択肢がかなり広がり、中学のころとは違う世界になってくる。高校野球の甲子園大会ではないが、自分はここの高校でやったという思いにつながるような分かりやすい名前が良いと考える。結果的には、多数決によらず、決めるべきではないかと考える。
- ・また、様々なマイナーチェンジは再編後に学校を作り上げていくのだから、新高校の中で自然に生まれ議論として出てくるのがよいだろう。

## (2) その他

(牧田委員)

- ・前期再編後に同窓会がどうなったかが分かる資料を、次回準備していただきたい。それに則するという話ではないが、そういう資料があれば意見を言いやすい。

(神川委員)

- ・前期再編の検証で挙げた校長先生や保護者の声の代表的なものを次回資料として提示してほしい。
- ・前期再編によって通学距離と時間の負担が増した生徒がいるのかについて、分かる範囲で資料をお願いしたい。

(金岡会長)

- ・来年4月に開校となると、9月の県議会で条例改正が必要となる。その前に、教育委員会、総合教育会議でも議論するためには、この開設準備検討会で8月中には基本的な考え方を取りまとめたい。
- ・本日は、委員の皆様から様々なご意見をいただいた。特に、高校は地域の名前が重要という意見も複数の方から出された。前回の高校再編の実

績もあるので、その時の議論も踏まえながら検討していきたい。

- ・校歌、校章など具体的なことについては、さらに議論が必要。企業であってもブランドをどう作っていくかというのは難しい。せっかくあるブランドを捨てるというのも非常にもったいないし、そのブランドをどういう形で継承していけばよいかということが必要であり、新しい学校を作るからすべてリセットでよいということはないと思う。それでは、新しい高校の卒業生にとってかわいそうなことになる。伝統は何としても継承した形で、新しい高校、校名に引き継がれていかなければならない。

## 6 閉会

教育長が閉会の挨拶をし、10時55分、議事が終了したので、司会が閉会を宣した。